

物語におけるライフ・ストーリーの効用
——『ジェーン・エア』の場合——

Effective Life Stories in Novels

——A Case of *Jane Eyre*——

鬼塚 雅子

ONIZUKA Masako

物語におけるライフ・ストーリーの効用

——『ジェーン・エア』の場合——

Effective Life Stories in Novels

——A Case of *Jane Eyre*——

鬼塚 雅子

ONIZUKA Masako

Abstract : We have chances to tell our life stories throughout our lives. We tell aspects of such stories when we introduce ourselves, promote ourselves, insist on our ideas, or declare our love. We also do so when we want to share who we are with others or dispel their misunderstandings. On the other hand, at times we may listen to our own life stories as related by others who describe events from our past, secrets of our birth, or our early lives that we cannot remember. When telling or hearing about our life stories, we look back on bygone days. Such reflection frees some from the shackles of the past allowing them to embark on new lives while offering others hints for solving their problems or relieving worries. Life stories, which extend from the moment of our births to the end of our lives, contain our futures as well as our pasts.

The eponymous heroine of Charlotte Brontë's famous English novel *Jane Eyre* (1847) has a very dramatic life. Modeled on Brontë herself, Jane is an independent working woman who lives in a conservative period in the distant past. She hunts for employment, finds a position, changes her job and later loses it. In the course of events, she at times tells others the narrative of her life and at times listens to others as they recite it. I rely on Mark L. Savickas' career construction theory to explore the effectiveness and importance of telling and listening to her life narrative in the story.

キーワード：ライフ・ストーリー、ナラティブ、サビカス

はじめに

人は自分について語る機会が人生の中で何度かある。自己紹介、自己アピール、愛の告白など、相手に自分をもっと知ってもらいたいときや誤解を解くために、人生の一部であったとしても、自分のライフ・ストーリーを何度か他人に話す経験をする。当然のことながら、他人のライフ・ストーリーを聴く、聞かされるといった経験もする。さらに、自分では思い出せなかった過去の出来事や知らなかった自己の生い立ちや出生の秘密を他者によって知らされることもあるかもしれない。それは単に情報の確認や収集にとどまるとは限らない。自分のライフ・ストーリーを語ったり、聴くことにより、人は自分の過去を振り返る。それによって、過去を見つめながらも過去にとらわれず、過去を過去とみなして、未来につなげる人もいれば、過去にひきずられ続けている自分の姿や自分の心の奥底に潜んでいた本音に気づく人もいる。また、過去をヒントに今悩んでいる問題の解決の糸口が見えたりすることもあるだろう。誰も過去を切り捨てることはできない。過去があつての今であり、今が未来につながっていくからである。この考え方は近年注目されているサビカス (Mark L. Savickas 1947-) のキャリア構築理論に通ずる。本稿では、そのサビカスの理論を用いて、英国の著名な小説『ジェーン・エア』(Jane Eyre, 1847) を分析する。『ジェーン・エア』はシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) によって170年前に書かれた小説だが、今でも人気が高く、愛読者が多い。若い女性ながら現代の我々には想像できないほどドラマチックな人生を送る主人公ジェーンは、作者自身をモデルにした働く自立した女性である。自ら仕事を探し、転職をし、失職もする。時には悲惨で、時には刺激的な自分のライフ・ストーリーをジェーンは何人かに語る。そして断片的にだが、自分のライフ・ストーリーが他者によって語られるのを聴く。本稿では、『ジェーン・エア』という作品とキャリアを構築していく主人公ジェーンという人物を、そのライフ・ストーリーの描かれ方を通して考察する。

1. ライフ・ストーリーを語る

キャリア構成理論では、アイデンティティ・ナラティブは、いくつかの短いストーリーからなる一篇の小説に似ている。マクロナラティブは、短いストーリーと

なり、人はそれをつなげて1つの長いストーリーあるいはマクロナラティブを形づくる。小さなストーリーは、大きなストーリーを作る際にその人が選ぶ出来事やエピソードの候補を提供する。一つひとつの短いストーリーをナラティブ・アイデンティティへと筋立てすることによって、個人はマクロナラティブを描く。・・・筋立てにはそれら小さなストーリーが使われ、人生というより大きく壮大なストーリーが描き出され裏付けされる。・・・筋立てしてマクロナラティブを作ることによって、人生は全体的なものになる。なぜなら、人はそれによって1つのパターンを認識するからである。マイクロストーリーが集積しそれぞれが一貫したものになるにつれて、再現、繰り返し、連続性という、暗に示された1つのパターンが明らかになっていく。そして、人生におけるそのパターンが、自分自身と他者に対する人、を明らかにするのである。¹

上記のサビカスの理論のように、『ジェーン・エア』の中では、主人公のジェーン自身はもちろんのこと、義理の伯母のリード夫人、その召使ベッシー、友人ヘレン、学校経営者のブロックルハースト、資産家のロチェスター、従兄弟セント・ジョンらがジェーンのライフ・ストーリーを断片的に、時には一方的な主観をこめて語る。かれらとジェーンの間にはそれぞれの小さなストーリーであるマクロナラティブが存在する。そうした彼女の小さなストーリーが集積して、大きなストーリー、すなわち『ジェーン・エア』という物語を構成している。登場人物たちが語るジェーンのライフ・ストーリーに焦点をあてて、物語を分析していく。

ジェーン・エアが初めて自分のことを語るのは10歳のとき、相手は伯母であるリード夫人に呼ばれた薬剤師ロイド氏である。ロイド氏の質問に答える形で、ジェーンは自分の置かれた立場と生い立ち、すなわちライフ・ストーリーの一端をたどたどしく語る。

“No: . . . , and besides, I am unhappy, — very unhappy, for other things.”

“What other things? Can you tell me some of them?”

“For one thing, I have no father or mother, brothers or sisters.”

“Don’t you think Gateshead Hall a very beautiful house?” asked he. “Are you not very thankful to have such a fine place to live at?”

“It is not my house, sir; and Abbot says I have less right to be here than a servant.”

“. . . . Have you any relations besides Mrs Reed?”

“I think not, sir.”

“None belonging to your father?”

“I don’t know:”²

ややちくはぐな会話ながら、ジェーンが直面する問題解決に影響を与える会話の流れになっていく。ロイド氏の訊き方は、子どもに対して丁寧で常識的である、核心にふれることがなくても、順序よく、流れに沿って質問をしている。“How much I wished to reply fully to this question! How difficult it was to frame any answer! Children can feel, but they cannot analyze their feelings;...” (p.56) と後にジェーンが回想しているように、せっかく望んでいた質問に答えられるチャンスを与えられたにもかかわらず、幼いジェーンは自分の気持ちや出来事をうまく説明できない。子どもは感じることはできても、その感じを分析できない、仮にできたとしても、言葉に表わす方法を知らないのだとそのときの自分をジェーンは後に振り返って説明する。亡くなった伯父の幽霊の出る部屋に閉じ込められたと思い込んでいることで激しく興奮した精神状態も、彼女が自分のライフ・ストーリーを順序立てて語るができない原因だろう。しかしいくつか質問され、自分の知っている狭い範囲内で、自分の置かれた境遇について答えていくうちに、ロイド氏が発した一言がジェーンにとって問題解決の糸口になる。

“Would you like to go to school?”

Again I reflected: . . . Besides, school would be a complete change; it implied a long journey, an entire separation from Gateshead, an entrance into a new life.

“I should indeed like to go to school,” was the audible conclusion of my musings.

. . . : “The child (i.e., Jane) ought to have change of air and scene,” he added, speaking to himself; “nerves not in a good state.” (p.57.)

ジェーンは自分が孤児であり、リード家が自分のいるべき場所でないことを再認識するが、どこへ行けばいいのかわからない。だが、ロイド氏との会話がきっかけで、彼の発した学校というキーワードによって、ジェーンの人生（キャリア）は大きく変わる。ロイド氏はリード家に留まった方がよいと（身寄りのない孤児は金持ちの親戚の家にいる方がよいとするのがロイド氏も含めて当時の一般的な考えだろう）ジェーンに勧めたが、彼女の心身の状態から、転地の必要性をも考える。結果的に、ジェーンのリード家を出たい、外の世界に行きたいという希望を叶えることになるのである。ロイド氏とジェーンの会話は現代のカウンセリングを思わせる。

リード家を出たジェーンは全寮制のローウッド慈善学校に入学する。そこでヘレン・バーンズに出会い、なんとか自分のことを理解して欲しい、友人になってもらいたいと思い、自分のライフ・ストーリーを一方的にまくしたてる。

In her turn, Helen Burns asked me to explain; and I proceeded forthwith to pour out, in my own way, the tale of my sufferings and resentments. Bitter and truculent when excited, I spoke as I felt, without reserve or softening.

Helen heard me patiently to the end; I expected she would then make a remark, but she said nothing. (p.90.)

年長のロイド氏が相手のときとは違って、ヘレンに対するジェーンの話し方は感情的で口数も多い。ロイド氏のときは断片的で、言葉もうまく出てこなかったから、このときがジェーンにとって自分のライフ・ストーリーを初めて他人に語ることになると言ってもいいだろう。同年齢の似たような境遇の少女ならきっと共感してくれるだろうと思いながら語るのも、感情が露わになり、話す内容もかなり大げさになったと推測できる。ジェーンは自分が不幸で、自分がどんなに不公平な扱いを受けたかをわかってほしい、自分の悔しさに共感してほしい、同情してほしいと期待している。しかし、ヘレンの反応はジェーンの期待を大いに裏切る。

“...; but how minutely you remember all she (i.e., Mrs Reed) has done and said to you! What a singularly deep impression her injustice seems to have made on your heart! No ill-usage so brands its record on my feelings. Would you not be happier if you tried to forget her severity, together with the passionate emotions it excited? Life appears to me too short to be spent in nursing animosity, or registering wrongs.” (p.90.)

ヘレンはあまりに穏やかで寛大でジェーンは拍子抜けしただろう。どうしてわかってくれないのかともどかしい思いを感じただろう。ジェーンは性格は激しく、思い込みも強い。人に対する感情も激しく、喜びも憎しみも並み以上である。相手の反応はともかく、ジェーンが自分の気持ちを思い切り人にぶつけ、全部吐き出し、そして聴いてもらったのはおそらくこれが人生で初めてのことだっただろう。同調もせず、その気持ちをあおることもなく、非難することもなく、淡々とジェーンを分析し、助言をするヘレンの言葉は真実であり、ジェーンにとって物足りなかっただろうが、癒しの薬のようなものだったかもしれない。ヘレンは話しているうちに、その内容がジェーンの上話から離れ、自分に言い聞かせる言葉になっていく。しかもそれは宗教的な色彩の濃い、救いを語るものである。ジェーンのめらめらと燃える火のような言葉に、ヘレンは清い水を思わせる言葉をかける。つまり、激しいジェーンの怒りの感情が、ヘレンの寛大さによってやや鎮火されたと考えられる。と同時に、ヘレンのように生きられたらどんなに楽だ

ろうかという作者ブロンテの願いが込められていたと思われる。つまり、決してできないが、そうありたいという理想の人生論がヘレンの言葉の中にあるのである。ヘレンはジェーンのライフ・ストーリーを受け止めたとしても、それを享受することも同調することもしない。彼女はジェーンの話聴きながら、自分の身の上や未来（死後の世界）を考えていたのだ。だが、その現実を超越した感覚は現実には激しい不満と憤りを抱くジェーンには必要なものだったのだろう。

ローウッドへ来てから3週間経った頃、経営者であるブロックルハーストが現れる。彼によっておぞましく脚色された自分のライフ・ストーリーを全校生徒と先生方に語られ、ジェーンは絶望の淵に陥るが、テンブル先生との会話から救いの光を得る。テンブル先生との会話もまたカウンセリングを思わせる。ジェーンは素直に自分の気持ち、悲しさや悔しさを先生にさらけだすと、先生は優しく受け止める。

I resolved in the depth of my heart, that I would be most moderate — most correct; and, having reflected a few minutes in order to arrange coherently what I had to say, I told her all the story of my sad childhood. Exhausted by emotion, my language was more subdued than it generally was when it developed that sad theme; and mindful of Helen's warnings against the indulgence of resentment, I infused into the narrative far less of gall and wormwood than ordinary. Thus restrained and simplified, it sounded more credible: I felt as I went on that Miss Temple fully believed me. (pp.102-103.)

ジェーンはここでまた自分のライフ・ストーリーを語ることになる。しかしヘレンに語ったときとかなり違い、感情を抑えて、大袈裟にならず、穏やかに話したことによって、テンブル先生の信用が得られ、未来への道が開ける。つまり、ジェーンのライフ・ストーリーを信用したテンブル先生が、ジェーンの潔白を証明するために、ロイド氏に手紙を出してくれたのである。

テンブル先生とロイド氏の手紙によって皆の信頼を得たジェーンは勉学に励み、卒業後は教師になる。ジェーンが迷うことなく教師になったのは、テンブル先生がキャリアというロールモデルにあたるからだだろう。後ろ盾のない孤児のジェーンが成功する道（職業）は教師であり、愛情に飢えていたジェーンが唯一愛情を抱くことができ、且つ愛情を注いでもらえる人は、ヘレンの死後、テンブル先生だけであった。したがって敬愛するテンブル先生が結婚して学校を去ると、ジェーンが8年間のローウッド学校の決まりきった生活に飽きてしまうのは当然の成り行きである。「自由を渴望した、自由を求めてあえいだ」とあるように、ジェーンは自力で転職活動をする。時間はかかったが、うまく採用通知を貰ったジェーンは学校を出て、一人で新しい世界へ飛

び込んでいく。この生き方には彼女の幼少期の思い出が大きく関わっている。サビカスによれば幼少期の思い出は非常に重要な要素を持っている。「幼少期の思い出は、その人の自己説明という全作品の中心的なストーリーを示している。・・・幼少期の思い出は、具体的なナラティブを用いて、人生に関する抽象的な結論を呈示する」³ からである。さらにある意味で、思い出にはそれを語る本人の信念や強い願望、今後生きるための処方箋が含まれているという。⁴ だからこそジェーンが幼少期の辛い思い出を細かなところまで克明に覚えているという事実は無視できない。その思い出は彼女のキャリアにも大きく影響している。18歳で一人で見知らぬ土地へ行くことも厭わない、むしろ希望を抱いて行ったことのないソーンフィールドでの住み込みの仕事選びが迷いなく実行されたのはそのためであろう。

家庭教師としてソーンフィールドに来て3か月ほど過ぎた頃、雇い主であるロチェスターの質問に答える形で、ジェーンは何度目かの自分のライフ・ストーリーを簡単に語る。両親兄弟及び親戚（ジェーンは親戚はいないと嘘をつくが、リード家は彼女にとって憎しみの対象でしかないので、いないも同然なのだろう）、出身学校、経営者であるブロックルハーストについて、身につけている教養（ピアノ、水彩画）などをロチェスターは命令口調で尋ねる。このとき、身の上（ライフ・ストーリー）をあれこれ問うことで、ロチェスターがジェーンに関心があったことをにおわせている。ただこの段階では恋愛にまで発展するか否かは不明である。一方、ジェーンも最低限の範囲内で自分について説明している。

物語が後半に入り、ロチェスターと結婚しようとしたジェーンは、それが二重結婚になるということ、つまりロチェスターには狂人の妻がいることやその結婚のいきさつを知ることになる。ロチェスターの悲劇的なライフ・ストーリーを聞いたジェーンは、これ以上ない衝撃を受け、ソーンフィールドを出て、あてもなく何日間もさまよい、リヴァース家の前で力尽きて倒れる。落ち着きを取り戻したジェーンはセント・ジョンを初めリヴァース家の人々に、偽名だと断った上でジェーン・エリオットと名乗り、自分の身の上話をする。孤児で、牧師の娘であること、他家に預けられて育ち、ローウッド慈善学校で教育を受けたこと、2年間教師としてすごした後、住み込みの家庭教師になるため学校を去ったこと、理由は言えないが、家庭教師の仕事を辞職しなければならなくなったことを語る。ジェーンの話したライフ・ストーリーは信用され、セント・ジョンと二人の妹たちであるダイアナとメアリーに受け入れられ、彼らの家であるムーア・ハウスに落ち着く。ジェーンの語った断片的なライフ・ストーリーはその人柄と身につけた教養から真実と認められ、その後、兄妹と召使ハンナと平穏な日々を送ることができた。ジェーンの実力と忍耐力と率直さが大いに関係していることは言うまでもない。明らかに部分的に偽りのライ

フ・ストーリーが受け入れられたわけだが、あまり問題にされないことがここでは興味深い。

ジェーンの場合、感情をこめて激しく語るライフ・ストーリーより、淡々と語るごく簡潔なライフ・ストーリーの方が周囲に人たちに信用されている。人は事実を知りたい場合、主観が入らない飾りのないシンプルなストーリーの方が受け入れやすいのだろう。

2. ライフ・ストーリーを聴く

孤児ジェーンは幼少期に今で言う虐待—義理の伯母からは精神的虐待、従兄弟からは身体的虐待（暴力）—を受け続ける。その扱いは召使にまで浸透している。召使は主人である伯母に絶対服従であるから、ジェーンの身の上に同情しながらも、従兄弟とやりあうと一方的にジェーンを責める。それは言葉による虐待ともいえる。下記の召使の台詞は、横暴な従兄弟にけがをさせられたジェーンが逆襲に出た直後に発せられたものである。

“You ought to be aware, miss, that you are under obligations to Mrs Reed: she keeps you: if she were to turn you off you would have to go to the poorhouse.”

I had nothing to say to these words: they were not new to me: my very first recollections of existence included hints of the same kind. This reproach of my dependence had become a vague sing-song in my ear; very painful and crushing, but only half intelligible. (pp.44-45.)

身分制度のない現代では上記の召使の台詞は、不公平な社会の中でジェーンが厳しい状況におかれていると理解できる。それでも召使の中では唯一ベッシーがジェーンのことを思いやっていることと、短いながらもジェーンのライフ・ストーリーの一部を知ることができる。孤児である自分の立場をジェーンは大人になってから以下のように振り返る。

I was a discord in Gateshead Hall; I was like nobody there; I had nothing in harmony with Mrs Reed or her children, or her chosen vassalage. If they did not love me, in fact, as little did I love them. . . .; a heterogeneous thing, opposed to them in temperament, in capacity, in propensities; a useless thing, incapable of serving their interest, or adding to their pleasure; a noxious thing, cherishing the germs of indignation at their treatment, of contempt of their judgment. I know that had I been a sanguine, brilliant, careless, exacting, handsome, romping child

... Mrs Reed would have endured my presence more complacently; ... (p.47)

ジェーンの自己分析はかなり鋭く、厳しく、自分を甘やかさずに自己批判している。子供時代は自分の身の上をひたすら嘆き、不公平な世の中を憎んでいたが、成長したのちには当時の自分を伯母の立場から振り返ることができている。しかし容赦なく自分をシビアに見つめているところから、大人になってもその激しい性格は変わっていないと言える。

I could not remember him (i.e., Mr Reed), but I knew that he was my own uncle — my mother's brother — that he had taken me when a parentless infant to his house; and that in his last moments he had required a promise of Mrs Reed that she would rear and maintain me as one of her own children.

A singular notion dawned upon me. I doubted not — never doubted — that if Mr Reed had been alive he would have treated me kindly; ... (p.48.)

ジェーンは幼いながらも、リード夫人と自分との関係、リード氏と自分とのつながり、自分の両親のこと—父親が貧しい牧師だったこと、身分違いの結婚に反対して怒った祖父リードが娘であるジェーンの母親に財産を与えなかったこと、ジェーンが赤ん坊の頃、両親がチブスにかかりこの世を去ったことなどを、召使たちの話から聞いて知る。自分のライフ・ストーリーの始まりを親でなく、赤の他人、しかも自分より下の身分の召使たちから聞かされるというのは、当時の感覚ではかなり屈辱的であっただろう。

次にジェーンが自分のライフ・ストーリーを聴くのは（1章で少し触れたが）ローウッドに来てから3週間後、学校の経営者で管理者の Brocklehurst によってだった。Brocklehurst は生徒全員の前で、ジェーンを腰掛けの上に立たせて皆のさらしものにしただけでは飽き足らず、悪の化身だと罵倒する。リード夫人を天使のような女性として褒めたたえ、ジェーンは異邦人で、悪魔が下僕として身代わりになっている存在（“the Evil One had already found a servant and agent in her” p.98）だと主張する。

Mr Brocklehurst resumed.

“This I learned from her benefactress — from the pious and charitable lady who adopted her in her orphan state, reared her as her own daughter, and whose kindness, whose generosity the unhappy girl repaid by an ingratitude so bad, so dreadful, that at last her excellent patroness was obliged to separate her from her own young ones, fearful lest her vicious example should contaminate

their purity. . . .” (p.99.)

ブロックルハーストの語る、悪意に満ちたジェーンのライフ・ストーリー（の一部）はごく短いものだが、ジェーンにこの上ない屈辱と恥ずかしさを与えた。自分のライフ・ストーリーが曲げられた物語として他人から聞かされたジェーンの心は打ち碎かれたも同然である。一言の弁解も許されずに、罰としてジェーンは半時間ほど腰掛けに立たされ、今後のはけ者にするよう言い渡される。そのときのジェーンの気持ちを見てみよう。

What my sensations were, no language can describe; but, just as they all rose, stifling my breath and constricting my throat, (p.99.)

. . . , and not molested by any; now, here I lay again crushed and trodden on; and could I ever rise more?

“Never,” I thought; and ardently I wished to die. While sobbing out this wish in broken accents, (p.100.)

この最悪の状態を救ったのはヘレンの優しさと他者によるジェーンの間違ったライフ・ストーリーの修正である。1章で述べたように、テンプル先生がロイド氏に問い合わせの手紙を出し、その返事が届くと、先生は全校生徒を集めて、ジェーン・エアに関する嫌疑を調査照会したことを説明し、ブロックルハーストによる汚名に対して完全に潔白であると断言してくれた。悲しい重荷から救われたそのときから、ジェーンは改めて勉強を始め、今後どのような困難にあっても自分で進む道を切り開いていこうと決心するのだった。

About a week subsequently to the incidents above narrated, Miss Temple, who had written to Mr Lloyd, received his answer: it appeared that what he said went to corroborate my account. Miss Temple, having assembled the whole school, announced that inquiry had been made into the charges alleged against Jane Eyre, and that she was most happy to be able to pronounce her completely cleared from every imputation. The teachers then shook hands with me and kissed me, and a murmur of pleasure ran through the ranks of my companions.

Thus relieved of a grievous load, I from that hour set to work afresh, resolved to pioneer my way through every difficulty. I toiled hard, and my success was proportionate to my efforts; my memory, not naturally tenacious, improved with practice; exercise sharpened my wits. (p.106.)

ライフ・ストーリーの修正によって、ジェーンはようやく辛い過去から脱し、明るい未来へ踏み出すことができたのである。それにテンブル先生との会話が深くかかわっていることは1章で述べたとおりである。ゆがめられたライフ・ストーリーでジェーンは絶望の淵に落とされたが、訂正は彼女の名誉を回復しただけでなく、そのキャリアにも大いに影響を及ぼした。それは他者のライフ・ストーリーを語る人（ブロックルハーストとロイド）の悪意と善意が深くかかわっているとと言える。

学校を卒業し、教師として2年勤めたのち、家庭教師として見知らぬ土地へ赴任することになった日に、かつての召使ベッシイが訪ねてくる。ベッシイとジェーンは一時間以上も昔のことや近況について会話を楽しむ。ジェーンのライフ・ストーリーを語り合いながら二人が楽しい時間を過ごすことは、ジェーンにとって新しい未来への門出を祝う贈り物のようだった。そのとき、その後のリード家の様子だけでなく、自分の身内（エア家）の情報をベッシイから得る。それは父方の伯父であるエア氏がリード家にやってきて、姪であるジェーンに会いたいという内容のものであった。このときはごく短い話で、ジェーンはほとんど気に留めなかった。ライフ・ストーリーとしては断片的番外編のようなものであるが、のちにジェーンの人生に大きな影響を与えることになる。

『ジェーン・エア』の物語が半ばに差しかかった頃、衝撃的なジェーンのライフ・ストーリーがリード夫人によって語られる。夫人が臨終と聞かされ、使いに連れられて二度と行くつもりがなかったゲーツヘッドのリード家へジェーンは戻る。リード夫人は懺悔ともいえる形で、隠していたジェーンのライフ・ストーリーの一部、つまり本来ジェーンが歩むはずだった人生の流れを書き換えたこと、またなぜそのような悪意に満ちた行為をしたかを告白する。

“I have had more trouble with that child than any one would believe. Such a burden to be left on my hands — and so much annoyance as she caused me daily and hourly, with her incomprehensible disposition, and her sudden fits of temper, and her continual, unnatural watchings of one’s movements! What did they do with her at Lowood? The fever broke out there, and many of the pupils died. She, however, did not die: but I said she did — I wish she had died!” . . .

“I had a dislike to her mother always; for she was my husband’s only sister, and a great favorite with him: he opposed the family disowning her when she made her low marriage; and when news came of her death, he wept like a simpleton. He would send for the baby; though I entreated him rather to put it out to nurse and pay for its maintenance. I hated it the first time I set my eyes on it . . . but an hour before he died, he bound me by vow to keep the creature.

I would as soon have been charged with a pauper brat out of a workhouse: . . .
(p.260.)

それまでジェーンは自分にひどい仕打ちをしてきたリード夫人を憎んでいたが、リード夫人にも彼女なりの理由があったのだと理解する。リード夫人は憎悪の感情をむき出しにしながら、ジェーンの生まれる前、さらには彼女が赤ん坊のときの話をする。本来なら我が子同様に扱わなければならなかった姪のジェーンを冷たく扱い、一方的に罰を与え、我儘息子が暴力をふるっても見て見ぬふりをしていたこと、つまり幼いジェーンに精神的及び肉体的虐待を与え続けたことを認めるのだった。ジェーンのライフ・ストーリーでは出だしの部分だが、それがジェーン的一生を大きく左右する時期だけに軽視できない。リード夫人の根底には妹思いの夫への不満、その妹への憎しみ（おそらく嫉妬）がくすぶっていたのだ。それはリード夫人にとって理性では解決できない感情であり、苦しみであった。夫もその妹も早死にしたため、リード夫人はその憎悪の矛先を罪のない子どものジェーンに向けたのだ。

“Because I disliked you too fixedly and thoroughly ever to lend a hand in lifting you to prosperity. I could not forget your conduct to me, Jane . . .”
“ . . . and I took my revenge: for you to be adopted by your uncle, and placed in a state of ease and comfort, was what I could not endure. I wrote to him; I said I was sorry for his disappointment, but Jane Eyre was dead: she had died of typhus fever at Lowood. . . .” (p.267.)

リード夫人は臨終のその日に、死後の永遠を勝ち取るために、ジェーンに彼女の叔父から3年前に来た手紙を見せる。マデイラにいる叔父は資産を蓄えたが、妻子がないため、ジェーンを養女とし、死後はすべて残すという内容の手紙だった。リード夫人は憎むジェーンが安楽な身分になるのが我慢ならないため、ローウッド慈善学校でチブスで死んでしまったと返事を出したと告白する。リード夫人がジェーンのライフ・ストーリーを故意に変えてしまったことは明らかである。もし手紙の要請に従って、ジェーンを叔父に引き合わせていたなら、ジェーンの人生は大きく変わったからである。しかし3年前のことゆえ、いまさら修正は効かない。大人になったジェーンはそのようなリード夫人を許すとはっきり言う。本来あるべきライフ・ストーリーを途中で勝手にゆがめてしまったリード夫人には愚息の奇行と自殺、一家の破産が降りかかり、その代償を払ったかのように不幸を十二分に味わってから死ぬことになる。

“Well, I must get it over. Eternity is before me: . . .” (p.266.)

“ . . . You were born, I think, to be my torment: my last hour is racked by the recollection of a deed which, but for you, I should never have been tempted to commit.” (p.267.)

リード夫人の告白は、ジェーンのライフ・ストーリーを曲げていたことへの懺悔であり、彼女なりにゆがめてしまったジェーンのライフ・ストーリーの修正をすることで、死ぬ前に安らぎを得ようとするためのものだった。はたして彼女が死後、安らぎを得たかどうかは誰にも分からない。ただ一つははっきりしているのは上記のリード夫人の死ぬ間際の言葉からも分かるように、リード夫人がジェーンに対して罪悪感を抱いていないことである。そのような伯母を哀れに思うジェーンは許すと言う。リード夫人が故意にジェーンのライフ・ストーリーを終わらせた（ジェーンは死んだと伝えたのだから）その罪は大きい、そこまでしてしまった夫人も哀れである。気性の激しいジェーンがここで許すという行動にでることに読者は少なからず驚きを感じるであろう。しかし、ソーンフィールドで過ごした穏やかな生活と、これまで自立した人生を歩んできたキャリアと、寛大だった親友ヘレンの思い出が融合されて、ジェーンの心にも許すという余裕がでてきたのではないだろうか。

伯母の死後、ソーンフィールドへ戻るが、ロチェスターとの結婚が実際で不可能だと知り、そのショックから飛び出す。彷徨った後たどり着いたムーアハウスに慣れてきた頃、セント・ジョンがジェーンのライフ・ストーリーを語り、ジェーンが聴くことになる。自分のライフ・ストーリーを他人が話すのを聴くというのは、サビカスのナラティブ手法の一つである。サビカスはクライアントが語るライフ・ストーリーを聴いたカウンセラーが後日、マイクロストーリーから再構成したライフ・ポートレートをクライアントに語る手法をカウンセリングで用いている⁵。そして「熟考と内省のためにライフ・ポートレートを使うことは、クライアントが自身をより深く見つめ、自分の人生をどのように歩んできたかを理解する手段となる」⁶ という。サビカスのライフ・ポートレートがライフ・ストーリーであることは明らかである。一度ジェーンの身の上話を聞き、その後、情報を集めたセント・ジョンはそれらのマクロナラティブを総合して、ジェーンが知らなかった部分を含めた彼女のライフ・ストーリーを語り始める。

“. . . : on reflection, I find the matter will be better managed by my assuming

the narrator's part, and converting you into a listener. Before commencing, it is but fair to warn you that the story will sound somewhat hackneyed in your ears; but stale details often regain a degree of freshness when they pass through new lips. For the rest, whether trite or novel, it is short. (p.405. 下線部は筆者によるものである。)

こうして語られる他者による自己のライフ・ストーリーという点では、リード夫人の話と肩を並べるほどセント・ジョンの話は衝撃的である。またセント・ジョンの言葉に“narrator”“listener”という語が自然に使われているのが興味深い。

“Twenty years ago, a poor curate — never mind his name at this moment — fell in love with a rich man's daughter; she fell in love with him, and married him, against the advice of all her friends, who consequently disowned her immediately after the wedding. Before two years passed, the rash pair were both dead, . . . They left a daughter, which, at its very birth, . . . Mrs Reed kept the orphan ten years: . . . she transferred it to a place you know — being no other than Lowood School, . . . It seems her career there was very honourable: from a pupil, she became a teacher, like yourself . . . She left it to be a governess: . . . she undertook the education of the ward of a certain Mr Rochester.” (pp.405-406.)

突然、自分のライフ・ストーリーが語られて、じっと聞いているのは辛いものである。口をはさみたくなるのも当然である。しかも自分の知らない事実が明らかにされようとしていることに不安と恐れが湧いてくるのを止められない。ジェーンは何度か口出ししようとするが、そのたびにセント・ジョンに抑えられる。

“. . . , but the one fact that he professed to offer honourable marriage to this young girl, and that at the very altar she discovered he had a wife yet alive, though a lunatic. . . . She had left Thornfield Hall in the night; every research after her course had been vain . . . Yet that she should be found is become a matter of serious urgency; advertisements have been put in all the papers; I myself have received a letter from one Mr Briggs, a solicitor, communicating the details I have just imparted. Is it not an odd tale?” (p.406.)

“Merely to tell you that your uncle, Mr Eyre of Madeira, is dead; that he has left you all his property, and that you are now rich — merely that — nothing more.” (p.407.)

セント・ジョンの語るジェーンのライフ・ストーリーこそ、初めて明かされた真実のストーリーであるといえよう。それまで断片的で、順序もばらばらで、主観が入り、勝手に修正されていたマクロナラティブが一つの流れを持つライフ・ストーリーとしてようやくまとまり、登場人物たちがつながった。ここで興味深いのはジェーンが関心を示したのはロチェスターのことであり、弁護士ブリッグズのことは聞き流してしまう。自分のライフ・ストーリーを聞かされたことで、ジェーンは自分にとって最も大切なものが何かを知る。それはロチェスターに他ならない。ジェーンには遺産のことなど頭に残らない。しかし常に冷静なセント・ジョンが現実的な事実—叔父エア氏の財産をジェーンが相続すること—をジェーンに気づかせる。そこでようやくジェーンは自分に従兄姉がいたことを知る。セント・ジョンは自分の母の旧姓がエアであり、母の二人の兄弟—一人が牧師でゲーツヘッドのミス・ジェーン・リードと結婚し、もう一人がマデイラの商人のジョン・エアがいたことをこのとき説明する。ソーンフィールドから逃げてさまよい、心身ともに衰弱したジェーンを救った3人兄妹、セント・ジョン、ダイアナ、メアリーが血のつながる従兄姉だという事実はジェーンにとって何より喜ばしい真実であり、彼女のライフ・ストーリーの輝く一部でもある。リヴァース家はリード家とは正反対の愛情の注げる身内であり、リード夫人の策略で失ったと思っていた財産も手に入るようになったのである。自分以外の人、すなわち他者が語る自分のライフ・ストーリーを聴くことで、ジェーンの知らなかった部分を補足した形のストーリーとなり、ジェーンは自分という存在の本来いるべき場所を知る。それによって、人脈が広がり、取りまく世界が大きくなる。これまで苦労の連続だった人生に光が差ししてきたと言ってもよいだろう。

3. ライフ・ストーリーさまざま

ジェーンのライフ・ストーリー以外に、ジェーンに関わる登場人物のライフ・ストーリーも語られる。ジェーン之母方の従兄姉たちであるリード家のジョン、エリザ、ジョージアナがどういう人生を歩んだのか、ロチェスターの父親と兄、そしておぞましい彼の結婚、若くして病死した親友ヘレン・バーズ、ジェーンにとって永遠の先生であるテンプル、ロチェスターがパリから連れてきた少女アディル、そして父方の従兄姉たち、セント・ジョン、ダイアナ、メアリーの人生が短いながらも物語の中で語られる。

セント・ジョンによってジェーンの人生に明かりがともった後、再三セント・ジョンに請われていた結婚とインド行きをジェーンが承諾した直後に、ジェーンは遠くに離れているはずのロチェスターが「ジェーン！ ジェーン！ ジェーン！」と叫ぶのを聞く。それはロチェスターの魂の声であり、ジェーンの心が求める声である。ジェーンは引き留めようとするセント・ジョンの手を振りはらう。セント・ジョンが敢えて留守をしている間に、ジェーンはムーア・ハウスを去る。長旅の後、ソーンフィールド館に着くが、火事でロチェスターの妻が死んだこと、妻を助けようとしたロチェスターが負傷し、盲目になったことを知る。そして農園の別邸に世話をする老夫婦と一緒にロチェスターがいると聞き、ようやくジェーンは彼と再会する。

ジェーンはロチェスターに問われるまま、別れた後の自分のライフ・ストーリーを隠さずに語る。最初にロチェスターに会ったときも、彼の一方的な問いに答える形式でジェーンは自分について話すが、今回も形式はほぼ同じである。二人が別れてから1年間に経験したこと、つまり、ロチェスターにとって空白のジェーンのライフ・ストーリーの部分を彼女は丁寧に語るののである。それによって、ジェーンも自分の人生を振り返る。物語では、さらに二人が結婚したこと、ロチェスターの片方の眼の視力が回復したことや子どもが生まれた事がジェーン（一人称）によって語られる。さらに、従兄弟セント・ジョン、従姉妹ダイアナとメアリーのライフ・ストーリーの続きも語られる。登場人物たちのライフ・ストーリーの終わりの部分は駆け足のように語られるが、それを知る（聴く）ことで読者は納得し、安心し、満足する。

この作品が一人称で語られていることから、『ジェーン・エア』という作品自体が、ジェーンが読者に自分も含めた登場人物たちのライフ・ストーリーを語っているとみなすことができる。そう考えると、この作品そのものがライフ・ストーリーの集合体と言える。

4. ジェーンのキャリアを分析する

「変幻自在 (protean)」と「境界のないこと (boundaryless)」が、新しいキャリアを象徴する2つのメタファーである。そして、キャリアは組織が所有するのではなく、個人個人が所有するものである。ホール (Hall, 1996) は、組織ではなく個人が21世紀のキャリアを形づくると述べて、変幻自在のキャリア (protean career) という概念を作り出した。変幻自在のという形容詞は、柔軟で、変わりやすく、適応的であるということの意味する。ホールは変幻自在のキャリアを、自律的なもので、外因性の価値ではなく内因性の価値によって形づくられると描き出した。自律的な価値を追求していく中で、個人はアイデンティティとアダプタビリティという2つ

のメタ・コンピテンシーを使いながら、仕事という航海図を描いていく。⁷

上記の説明にある通り、ジェーン・エアはそのキャリアを個人で所有し、彼女のキャリアは「変幻自在」と言える。彼女自身が判断して、転職し、辞職（雇用者であるロチェスターから逃げ出すという形をとったが）し、また自らの意思でセント・ジョンの仕事を手伝い、そこに生きがいを見出している。もちろん、生きるため、生活のためではあるが、ジェーンは自分でやりがいを感じるものを選択している。強制的に強いられているのではないし、嫌々やっているのでもない。自分なりに試行錯誤し、積極的に向上しようと努力している。現代のやる気のある仕事人となんら変わりはない。むしろそれ以上である。女性蔑視の時代に、若い女性がたった一人で生活していくには、偏見や差別と闘わなければならない不屈の精神と並々ならぬ努力と忍耐が求められるからだ。上記の引用にあるコンピテンシーはキャリアの場合、計画された（した）もの以外の要素である偶然をどう受け止め、活用するかが重要で、この偶然を積極的に必然に変えていくことができる思考特性・行動特性のことである。また、アダプタビリティはスーパーが提唱し、サビカスが引き継いだ理論だが、変化を受け入れて、適応できる能力を言う。ジェーン・エアはまさにこのコンピテンシーとアダプタビリティの二つの能力を持っている。時には意識的に、時には無意識に、ジェーンは変化を受け止め、苦しい思いもしながら、適応し、活用している。その力がなければ、縁故のない身の上で、学校教師や住み込みの家庭教師は務まらない。一人で生きていくために苦勞して身についた能力とも言える。

ライフ・ストーリーを語ることは自分自身を見つめ、見直すことである。したがって語る手段である言葉は非常に重要である。サビカスは「語る」ことや「言葉」について次のように述べている。

われわれは、語ることで自分自身を形づくる。言語は、意味を考え作り出すことを可能とし、生きていくための資源を与える。・・・キャリア構成理論は、本質的な自己の実現ではなく自己の構成に集中する。言葉は、先駆的な、いわば本質的な自己に固着しているものではない。むしろ、言語が自己概念を形づくり、自己を構成するのに必要な言葉を提供するのである。・・・

人はまた、内省性から生じる自己への気づきを適切に位置づけるために言語を用いる。言語は言葉によって過去を保ち未来を予測しながら自己を包含するので、ある意味われわれは言語の内側で生きているともいえる。言語は、自己を構成するのに必要な方法を提供するため、言葉が欠けることはそれに結びついた自己への視界も欠けることを意味する。・・・人は言語を道具として使いながら、自分の行動

と社会の関係を調整する。・・・この自意識的に創造された、個々の自己という考えは、経験を語るストーリーによって成り立っている。・・・自己とは、文化的に形づくられ、社会的に構成され、言語によって語られて発現した意識である。⁸

単にライフ・ストーリーを語るのではなく、これほど言葉には力があり、意味があるのである。『ジェーン・エア』に限らず、ライフ・ストーリーを語る時も聴くときも一人ではない。必ず話し手と聞き手が存在する。それは単なる対話というより、カウンセリングのようである。このようなカウンセリングをナラティブ・カウンセリングという。ナラティブ・カウンセリングでは「ライフ・ストーリーによって、人は過去から呼び戻された安心を得て、転機という不確実性に向き合うことができる。・・・そのストーリーによって人は新しい出来事に適応し、それらの経験を意味体系の中に吸収する。これによって、人は、自らの経験を理解し進み方を選べるようになる。」⁹ ジェーンがライフ・ストーリーを語る時、あるいは語られるときは、確かに人生の転機の時期にいる。ジェーンは常に一人で判断をする。全寮制の学校へ入学する、学校を退職して家庭教師の職に就く、ソーンフィールドを去る、受け取った叔父の遺産を従兄姉たちと等分に分ける、ロチェスターの元へ戻るなど、ジェーンは自分の心に従って行動し、人の意見に惑わされない。このように人生の流れに適応し、自らが自分の生き方を選ぶことは、当時の若い女性（現代の女性でも周囲の意見に翻弄される人は大勢いる）には極めて強力な勇気と決断力が求められただろう。そこがこの小説の魅力であり、現代でも読み継がれている理由であろう。さらにサビカスの構造主義的カウンセリングによれば、自らのストーリーを語ると、そのストーリーはより現実的なものとして感じられるようになる。より多くのストーリーを語れば語るほど、そのストーリーはより現実的なものとなる。「自分」を眺めれば眺めるほど、語り手は自身の自己概念をさらに発達させていく。つまり、ストーリーを語ることによって、自分が自分自身をどのように思っているかを結晶化させる。¹⁰ ジェーンの場合も、自分のライフ・ストーリーを最初に語ったとき（聴き手はロイド氏）、自分が自分で思っているほど自分の人生や親戚について知らないことに気づく。また、良い聴き手は要点を明確にするための質問を投げかけ、ストーリーの明瞭度を向上させるという。¹¹ この作品による良い聴き手はテンプル先生とセント・ジョンであろう。彼らとの会話で、ジェーンの人生は大きく前進したからである。

自活して人生を歩むジェーン・エアは、働く現代女性となら変わりはなく。そこに170年の時の流れはほとんど感じられない。キャリアは生涯、経歴、仕事などさまざまな意味を持つが、現代では内的キャリアと外的キャリアの両方向からキャリアを捉えるシャイン（Edger H. Schein,

1928-) の考え方がよく知られている。外側から、すなわち客観的に捉えたキャリアが外的キャリア、内側から、つまり主観的に捉えたキャリアが内的キャリアである。¹² 外的キャリアは職業（職種、業種）、学歴、地位など具体的に目に見えるものであるのに対して、内的キャリアは自分にとっての働くことの意味・価値・意義、つまり、やりがい、使命感、興味など、心の中に存在しているものである。この内的キャリアがはっきりしていないと外的キャリアは決められない。「やりたい仕事が見つからない」という場合は、内的キャリアが不明であることが原因である。ジェーン・エアの場合は、時代背景から女性が働くことが疎まれていたため女性ができる仕事に限られていたこと、彼女の置かれた状況（孤児で財産がない）から自活しなければならない生活環境にあること、人並み以上の才能がないかわりに努力と勤勉さは十分に持ち合わせていたことなどから、外的キャリアの範囲は狭いが、内的キャリアははっきりしている。言い換えれば、働く意欲は十分にあり、仕事にやりがいを感じているが、就ける職業が限られている。キャリアという言葉も概念もまだ全くなかった時代に描かれた小説だが、ヒロインは明確な内的キャリア意識を持っており、現代でも十分自活していける女性であるといえる。

キャリアを考える場合、問題解決力が重視される。基本的にはその力は自分にあるという。しかしほとんどの人がそれに気づかず、悩み続ける。『オズの魔法使い』では、問題解決の力、すなわちドロシーが自分の家に帰る方法は、虹のかなたにあるのではなく、ドロシー自身の中にあつた、つまり彼女自身が家に帰る力を持っていたことに、良い魔女グリンドによって最後に気づくのである¹³。このサビカスの記述はジェーンが物語の終わり近くに、遠く離れたロチェスターの声を聞いたシーンを思い出させる。ロチェスターが自分を呼ぶ声でジェーンは自分の心が何を求めているのか、自分の幸せが何であるのかを悟る。先に述べたように、ロチェスターの呼び声はジェーンの心の中の叫びである。つまり、ジェーンの問題解決方法は彼女自身の中にあつたことに気づくのである。

おわりに

サビカスの理論の中に、クライアントと好きな本についての記述がある。

人は、主人公が自分の問題と同じような問題を経験している本に惹かれる。クライアントの好きなストーリーは、彼ら自身の現状を伝える。さらに、好きなストー

リーでは、前進する台本が選ばれている。クライアントは、その台本が問題とそれに対処する方法を描き出すところに励まされる。ストーリーの台本は、クライアントが他の人は同じ問題をどのように解決したかを教えてくれるので、クライアントを安心させる。要するに、クライアントの好きなストーリーは、クライアントにとって生きるために役立つ台本を提供するのである。¹⁴

さらに、「好きなストーリーは、ロールモデルと同様、幼少期からずっと生き続けている」¹⁵ という。サビカスによれば、歌手のドリー・バートンは好きな本として『ちびっこきかんしゃだいじょうぶ (*The Little Engine That Could*)』をあげ、ウォルト・ディズニーは子どもの頃に読んだアンクル・リーマスの物語を決して忘れないと語り、ヘミングウェイは生涯にわたってマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィン』に魅了されていたという。¹⁶ また、フロイトはセルバンテスの描く理想像と自分を同一視し、自ら自分を知ることの探求を『ドン・キホーテ』から学んだという。¹⁷ そこで私が本稿を執筆するにあたり、題材として『ジェーン・エア』を選んだのも同様な理由かもしれないと思い当たった。初めて読んだのは物語の始まりのジェーンと同じ10歳頃だったが、そのときの強い印象はまだいくらか残っている。その後何度も読み直したのは、ジェーンが自分同様、学校教師になるために、あるいは家庭教師として働くにあたり、様々な苦勞をしたこと、女性といえども自立して生きていく姿に共感を覚えたからだと考える。ライフ・ストーリーを探求する題材は数多くあるのに、サビカスの理論を学習した際、真っ先に私の頭に浮かんだのは『ジェーン・エア』だった。教師を務める女性が主人公の小説はたくさんあるのにと自分でも不思議に思った。小説家セルバンテスがフロイトにロールモデルと台本の両方を与えたように、私にとって『ジェーン・エア』は生きるために役立つ台本であり、ジェーン・エアは問題解決の糸口を提供してくれるロールモデルだったのである。そして、ジェーン・エアが自らの力で苦難を乗り越え、前向きに生きていったように、自分の疑問に対する答えは自分自身の中にあるのだと改めて実感させられた。本稿において『ジェーン・エア』をサビカス理論で分析していくことは、私に自分自身を見つめ直す良い機会を与えてくれたと断言できる。

《注》

- 1 マーク・L・サビカス著・日本キャリア開発研究センター監訳・乙須敏紀訳『サビカス キャリア・カウンセリング理論』福村出版、2015、39頁。
- 2 Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, Penguin Books, 1988, London, p.56. 以後この本からの引用は文中にページ数を記す。

- 3 『サビカス キャリア・カウンセリング理論』106頁.
- 4 同書, 106頁.
- 5 同書, 173頁.
- 6 同書, 174頁.
- 7 同書, 21頁.
- 8 同書, 27～28頁.
- 9 同書, 55頁.
- 10 同書, 55頁.
- 11 同書, 57頁.
- 12 渡辺三枝子編著『新版 キャリアの心理学』ナカニシヤ出版, 2007, 115～116頁.
- 13 『サビカス キャリア・カウンセリング理論』155～56頁.
- 14 同書, 145頁.
- 15 同書, 145～146頁.
- 16 同書, 146頁.
- 17 同書, 147～148頁.

《参考文献》

Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, Penguin Books, 1988, London.

Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, Everyman's Library, 1991, London.

マーク・L・サビカス著・日本キャリア開発研究センター監訳・乙須敏紀訳『サビカス キャリア・カウンセリング理論』福村出版, 2015.

マーク・L・サビカス著・日本キャリア開発研究センター監修・水野宗次郎監訳・著・加藤聡恵訳『ライフデザイン・カウンセリング・マニュアル』遠見書房, 2016.

エドガー・H・シャイン著・二村敏子・三善勝代訳『キャリア・ダイナミックス』白桃書房, 1991.

渡部昌平編著『社会構成主義 キャリア・カウンセリングの理論と実践』福村出版, 2017.

渡辺三枝子編著『新版 キャリアの心理学』ナカニシヤ出版, 2007.

武石恵美子『キャリア開発論——自律性と多様性に向き合う』中央経済社, 2016.

デボラ・ラッツ著・松尾恭子訳『ブロンテ三姉妹の抽斗 物語を作ったものたち』柏書房, 2017.